

# ひょうごの遺跡

平成11年11月1日発行  
兵庫県教育委員会  
埋蔵文化財調査事務所  
神戸市兵庫区荒田町2-1-5  
〒652-0032 TEL 078-531-7011  
FAX 078-531-7014  
ホームページアドレス  
<http://www.hyogo-edu.yashiro.hyogo.jp/maibun-bo>

復興調査特集

## 阪神・淡路大震災と埋蔵文化財

— 復興調査5年の歩み —

大地が裂け、天上に召されし6千数百の御霊に哀悼の誠を捧げ、顧みてただ生命あることに感謝したあの時から、早5年を迎えようとしています。生きる勇気につなげたいと、砂塵舞い上がる復興現場に全国各地の都府県市教育委員会等から駆けつけて埋蔵文化財調査に当たってくださった皆さんの願いが、今、結実し、街は蘇ろうとしています。改めて先人の足跡に心を寄せてくださるようになった県民市民の方々ともども、あの大地震と埋蔵文化財について、静かに振り返る機会がやっと巡ってきました。12月4日、被災地・神戸・新長田のピフレホールで、ぜひお会いしましょう。先達の原口正三先生、和田晴吾先生、古山桂子先生、藤田明良先生、岡村道雄先生、寒川旭先生をはじめ全国から復興調査にかかわられた方々をお迎えし、その検証と展望について語り合うシンポジウムのひとときにしたいと、鋭意準備に勤しんでいます。この『ひょうごの遺跡』34号は、皆さんをピフレホールへ誘うプレリュードとして、編んでみました。最近も、トルコや台湾と大震災が続発しており、私たちの成果が幾許かお役に立てばと念じています。どうか、皆さんのお力添えでこのシンポジウムが大盛会となりますよう所員一同願っております。よろしくお願いします。

所長 寺内幸治



震災直後の風景（左上）・御蔵遺跡調査風景（左下・右上）・甦る街並み（右下）、いずれも長田区内で



# あの日から5年

—震災復興とともに歩んだ埋蔵文化財調査—

トルコ、台湾での大地震。大きな被害をもたらした震災の報道は、阪神・淡路大震災の記憶を呼びさます出来事でした。今年はその日から5年目の年となります。今回は、震災と埋蔵文化財の密接な関係についてお話ししたいと思います。

この大震災は、平成7年1月17日に発生しましたが、その被害は県南東地域を中心とした10市10町の広い範囲に及びました。その甚大な被害とともに、6,000名を超える方々の尊い命が奪われてしまいました。こうした地上の惨状に対し、地下にある埋蔵文化財（遺跡）も被災したかといいますと、決してそうではありません。確かに、被災地内の博物館では、中の土器が破損したりしましたが、遺跡そのものが大きな被害を受けたわけではありません。では、なぜ大震災と埋蔵文化財が結びつくのでしょうか？それは、震災後の復旧・復興に伴う再建事業（土木・建設）と密接に関係していたのです。



被災地に行く（平成7年：尼崎市内）

被災地の地下には、約250haの面積にのぼる遺跡が存在していると考えられました。これだけの面積の遺跡を今までのペースで発掘調査すると、10年以上の期間が必要な計算となります。これでは、速やかに住宅や工場を再建することは到底できません。そこで文化庁の指導に基づき、速やかに行われる復旧・復興事業に迅速に対応するために、「人・資金・法」の3本の大きな柱が立てられました。具体的には、発掘調査を担当する「人」、その経済的負担を軽減するための「資金」、さらにそれをバックアップするための「制度の改定」ということです。

特に、調査担当者としては、青森県から鹿児島県におよぶ、1都2府34県4政令指定都市から121名の方々の派遣を頂きました平成7年度からの3ヶ年

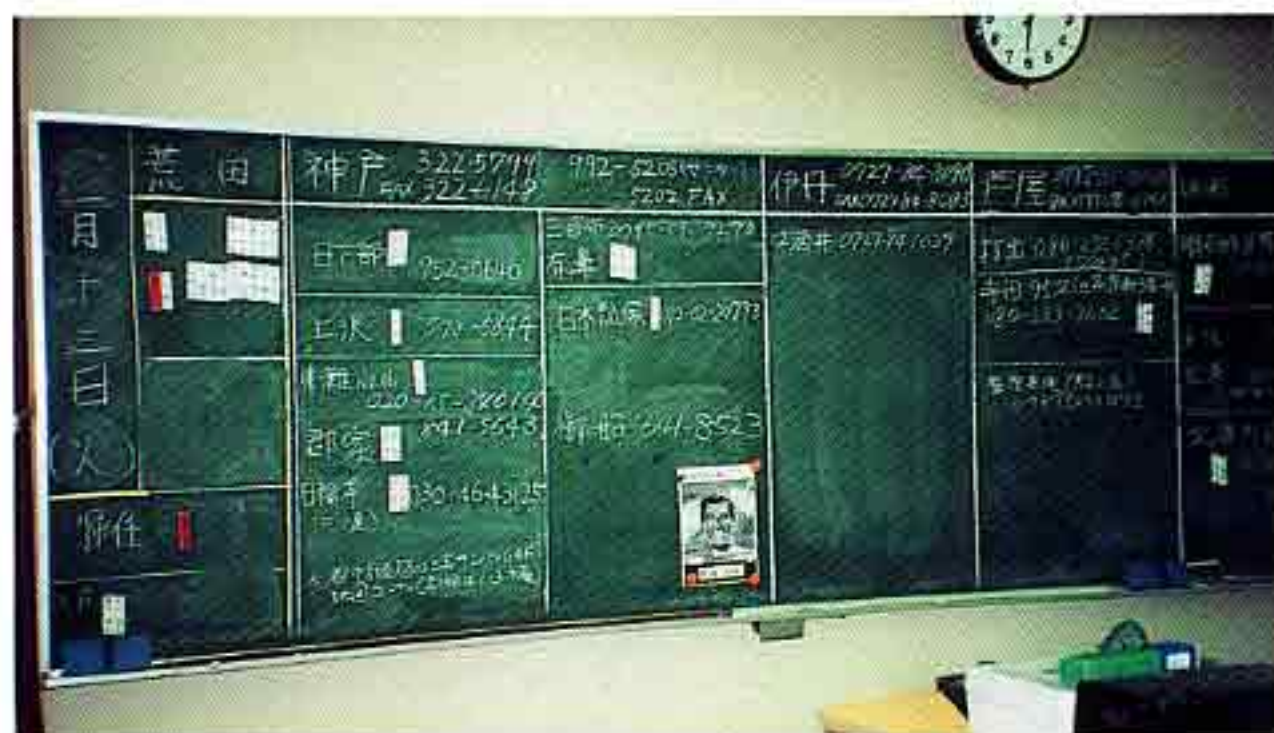


野島断層を見る（平成8年：北淡町内）

度の間に、実に370件以上の発掘調査を実施し、復旧・復興事業の推進に大きな支障をきたすことなく調査を進めることができました。

こうした調査のなかで、考古学的にも注目すべき成果を多く得ることができました。弥生時代中期の大規模な高地性集落である有鼻遺跡（三田市）、6世紀から8世紀にかけて製塩を行った貴船神社遺跡（北淡町）、重要文化財の櫓を支える石垣を今に残す明石城（明石市）、日宋貿易のために平清盛が整備したといわれる兵庫津遺跡（神戸市）、奈良・平安時代の東大寺領荘園の荘家と考えられる猪名庄遺跡（尼崎市）と、弥生時代中期において最大級の独立棟持柱建物跡が確認された武庫庄遺跡（尼崎市）、近世酒造蔵の遺構を良好に残した県指定民俗文化財沢の鶴大石蔵（神戸市）、これらの成果は、地域の歴史をより豊かなものとする事となりました。

また、今回のような3本柱からなる埋蔵文化財への取り組みは、全国でも初めての試みでした。それだけに、特に平成7年度からの3ヶ年度の実績と経験は、災害時における埋蔵文化財保護行政の新たな指針を示すものになろうとしています。同時に、この間の体験から得られた成果は私たちの大きな財産となりました。また、将来に向かってどのように生かしていくのかを提言することが、私たちが今後取り組むべき課題となっています。



各調査現場の連絡先（平成10年：事務所内）

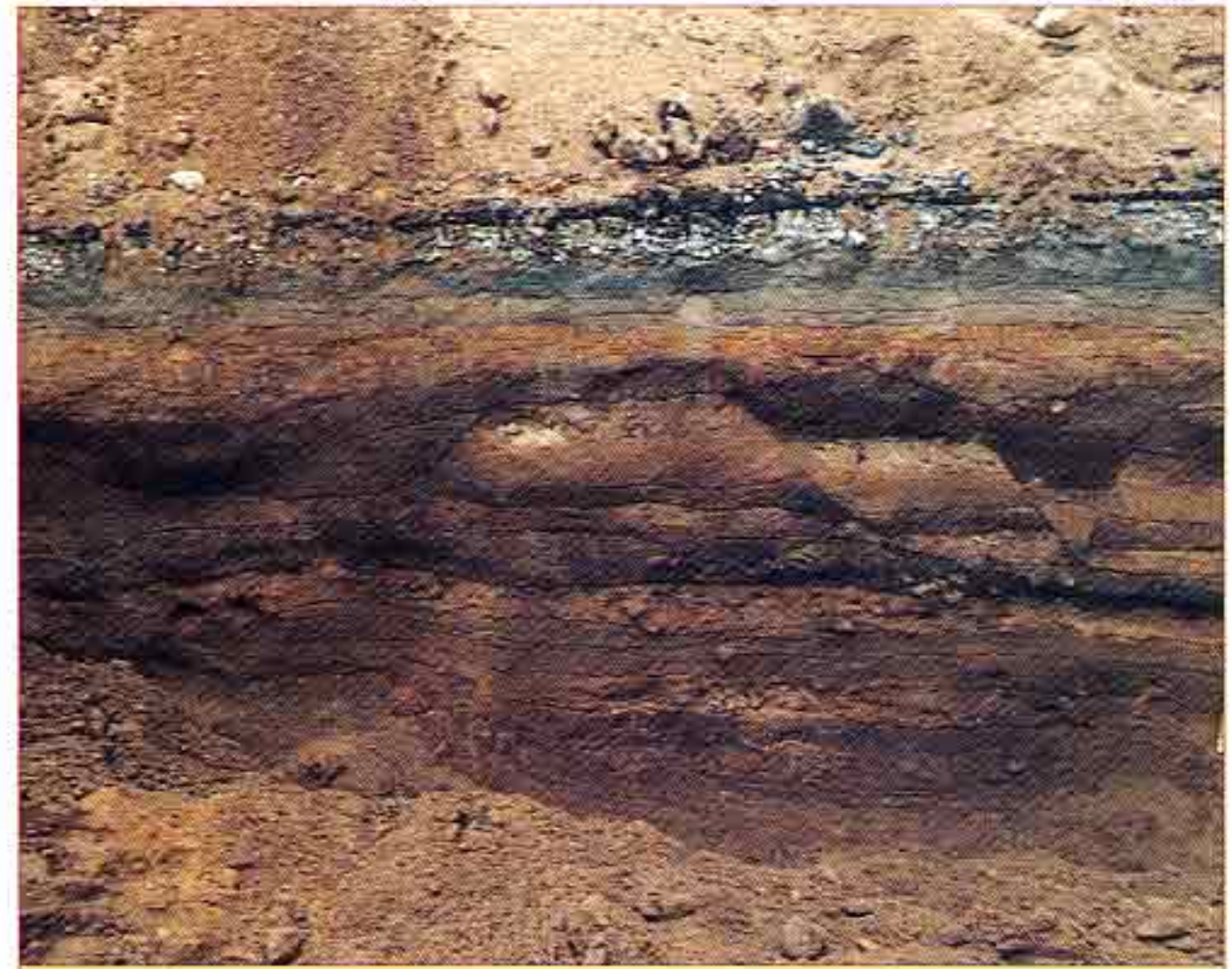




### 噴砂

かめだ 亀田遺跡（揖保郡太子町）

私たちのたっている大地はいくつもの地層が重なってできています。そのうち、地下水に満たされた締めりの悪い砂礫層が激しい揺れを受けると、地層全体が液体の性質を持つようになります。地震が発生するとその液状化した砂は、地割れなどから地表へ、砂泥となって噴き出します。



### 地滑り

ほうがづか 坊ヶ塚遺跡（神戸市東灘区）

この地滑りは、1596年9月に起こった伏見地震によるもので、震度6相当の規模が想定されています。この大地震は京都、大阪、そして六甲山南麓の神戸市域に大きな被害を与えたことが記録に残っており、先般の大震災を除けば、京都から淡路島にかけての活断層群の最も新しい活動とみられます。

## 地震と

地震のつめあと 発掘では過去の地震痕跡がしばしば見つかります。これらの地震痕跡が、どの時代の地層を壊しているのかを調べることで地震の起こった年代を知ることができます。ドイツ人ケンペルの日記などにもしばしば地震の記事が見られますが、文字に記録されない地震の年代を知る方法は遺跡の地震痕跡において他にありません。こうしたデータの積重ねは地震の起こる周期を調べる格好の材料となります。大震災以降、発掘調査による地震のメカニズムの解明がいっそう注目されています。

### 崩れた井戸

すみよしみやまち 住吉宮町遺跡（神戸市東灘区）

井戸の下半分は固く締まった土の中に、上半分は柔らかい砂の中に掘り込んで設置されていました。上半分の柔らかい砂の層が激しい揺れを受けて液状化し、地層がわずかに傾いた方向へ流れ出したため井戸も一緒に運ばれました。やはり、伏見地震によるものと考えられています。



## 考古学

### 破壊された古墳

にしもとめづか 西求女塚古墳（神戸市灘区）

約1600年に造られた前方後円墳の石室が、伏見地震によって起きた地滑りを受けて、大きく崩れ落ちている様子がうかがわれます。古墳は大量の土を盛り上げて造られますが、やはり、盛り上げた軟弱な部分の土が激しい揺れのために崩れてしまったものです。墳頂では最大2mの陥没が見られます。







約1800年前の畠 畝の間の溝を発見  
若松町遺跡 (神戸市長田区)



弥生時代の住居跡を掘る  
本山遺跡 (神戸市東灘区)



平清盛が改修した港 以後、貿易の拠点となった  
兵庫津遺跡 (神戸市兵庫区)



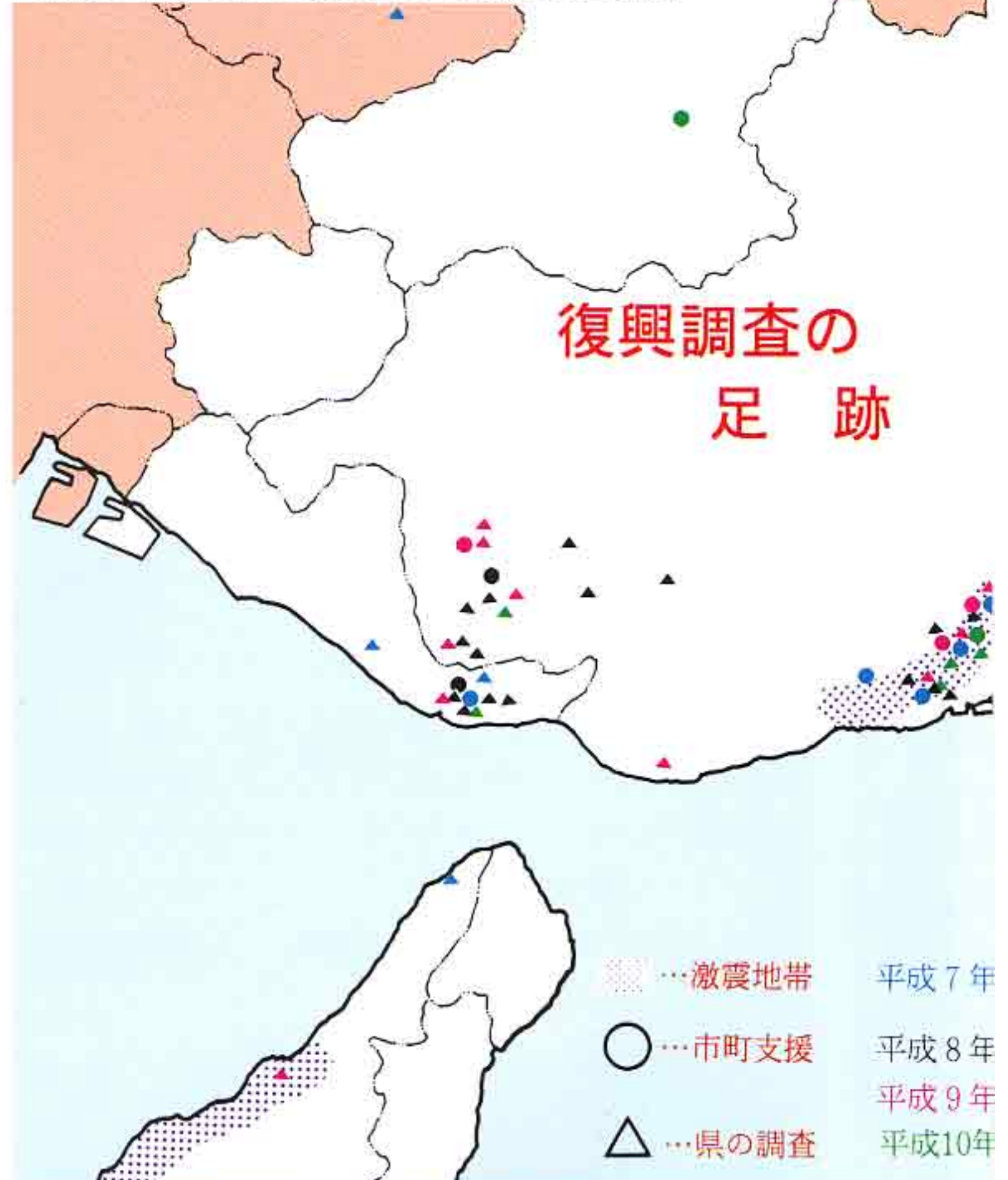
約2200年前の弥生人 石の矢じりが刺さったと見られる  
新方遺跡 (神戸市西区)



製塩の炉跡 古墳時代  
貴船神社遺跡 (北淡町)



稲作がやってきた頃のムラの周囲を巡る溝  
大開遺跡 (神戸市兵庫区)



地震で壊れた石垣の調査  
明石城 (明石市)





雲井遺跡 (神戸市中央区)  
方形周溝墓 棺の周りを溝が巡る (約2100年前)



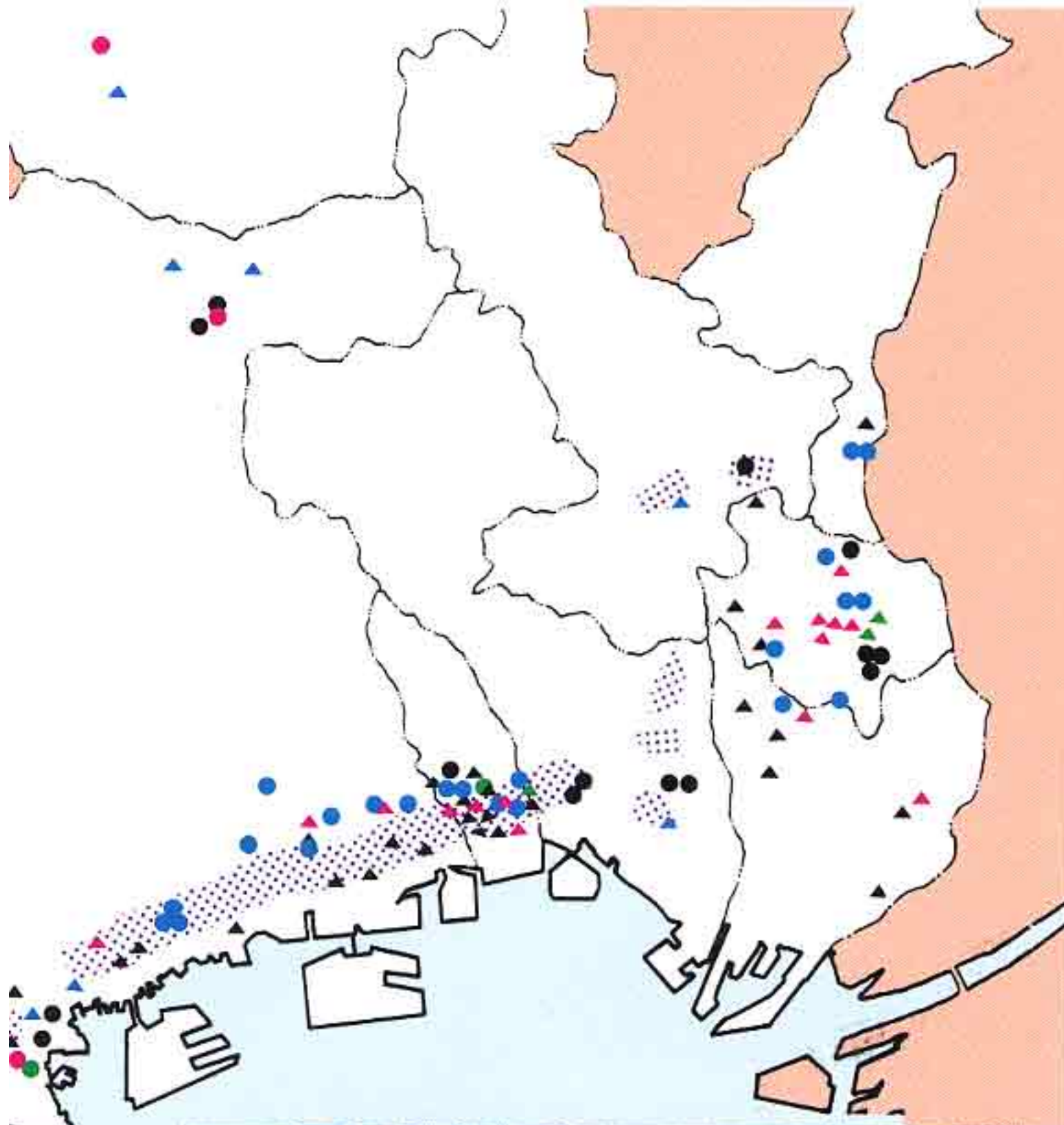
加茂遺跡 (川西市)  
縄文時代の埋設土器 棺の代用か? (約3000年前)



南本町遺跡 (伊丹市)  
埋没していた古墳 径15mほどの円墳



寺岡遺跡 (芦屋市)  
住居内に作られた竈跡 (約1550年前)



武庫庄遺跡 (尼崎市)  
約2000年前の大型棟持柱建物 当時では最大級



高畑町遺跡 (西宮市)  
呪符木簡 子孫の繁栄を祈願するまじない (右)



安倉南遺跡 (宝塚市)  
子持ち勾玉 1400年前の祭りの道具 (左)



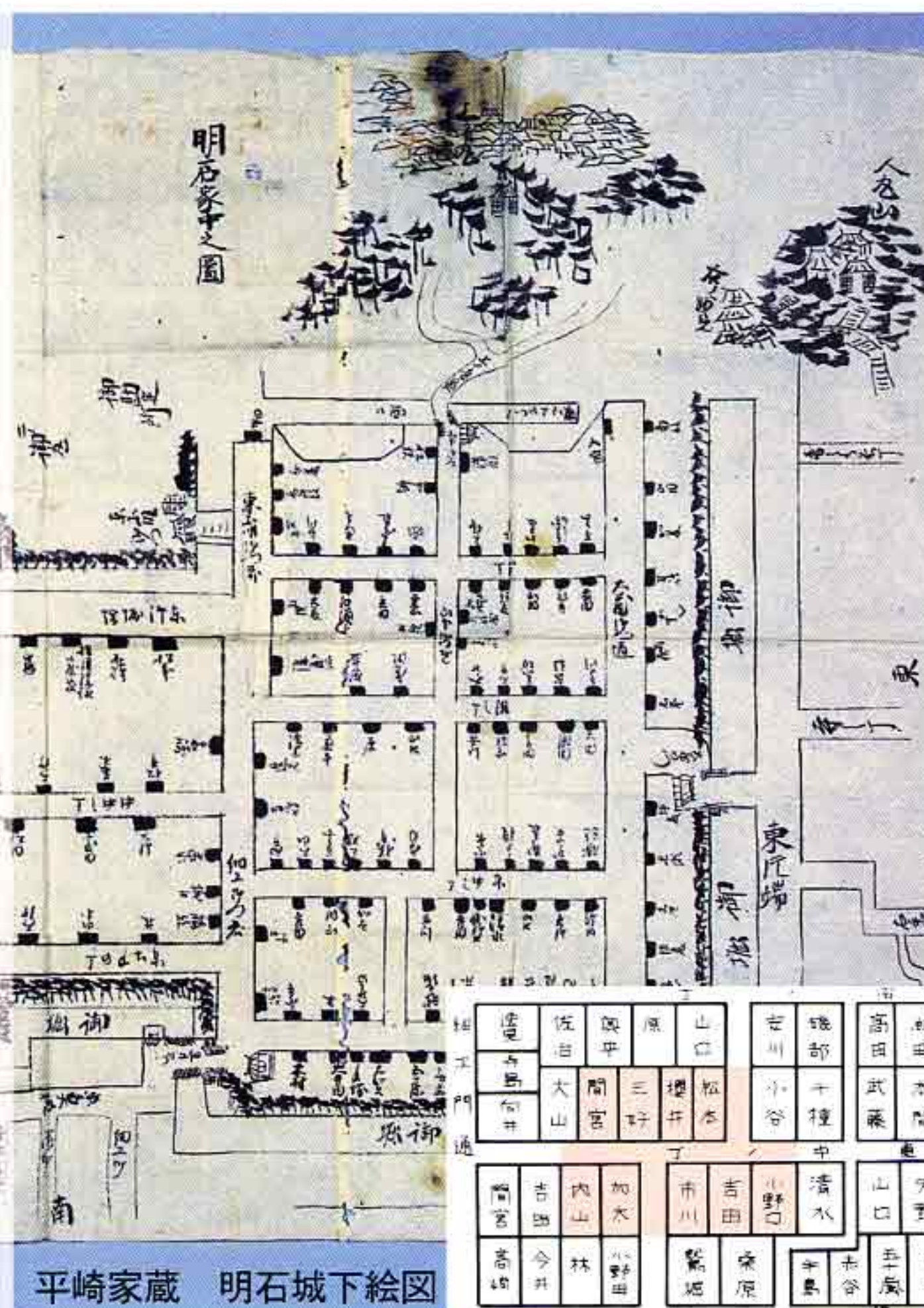
## 復興調査 最新の成果から

## 明石城武家屋敷跡

(明石市東仲ノ町)

市街地再開発事業に伴い、平成8年に始まった調査もこの7月でようやく終了しました。明石城は江戸時代に築かれた城で、武家屋敷を始めとする城下町もその時に造られました。設計は剣豪宮本武蔵によって行われたとも伝えられています。江戸時代の城下の様子を伝えるものに文久3年(1843)に描かれた絵図が残っています。調査した場所は、絵図を参考にすると10軒分の屋敷地と東中ノ丁および南へ曲がる路地が含まれています。発掘では門跡や屋敷地の境界を区画する溝が見つかり、この絵図が正確に描かれていることが証明されました。屋敷跡からは掘立柱建物跡、井戸、ごみ穴、埋桶(厠=トイレ)などの様々な生活跡が見つかりました。

現在の明石の町も城下町の町割りを利用しており、東仲ノ丁は調査を行うまでは、現役の道として利用されていました。アスファルトをはがして掘り下げていくと、地表から50cmほど下に石組みの側溝をとまなう江戸時代の道が残っており、この道に面する形で各屋敷の門跡が見つかりました。門は3本の主柱を建てており、柱の沈み込みを防ぐため礎石を据



平崎家蔵 明石城下絵図



東仲ノ丁：両側の石列は当時の側溝



内山家門跡

## 御城下厠(トイレ)事情

屋敷内では地面に埋め込まれた桶がしばしば見つかります。これらはどうも厠として用いられていたようで、排泄物をためておくためのものと考えられます。実は、当時人間の排泄物は肥料として利用されており、近郊の百姓がわざわざ買い付けに来ていました。当初、道から目立たないように屋敷の裏に作られた厠も、時代が下るにつれて買い付けの百姓が汲みやすいように道の近くへ設置されるようになりました。こんな移り変わりも発掘調査からうかがうことができます。





えています。同じ場所で何度か作り替えており、少なくとも2回の作り替えが確認できます。これは一つの柱穴に礎石が2段検出されることから分かったもので、古い門の柱を抜いた後、礎石を放置したまま土を盛り入れ、再度新しい礎石を据えたと考えられます。屋敷地内には、当然のことながら母屋が建っていたはずですが、該当する遺構は見つかっていません。建物跡としては柱を直接地面に埋めて建ち上げた3.3×9.0mほどの小屋が見つっています。屋敷地の境界には溝が掘られています、大半は浅くて狭いものです。当時は板塀や垣根などで仕切られていたのではないのでしょうか。また、屋敷地内には大小多くの穴が掘られています。ほとんどはごみ穴と考えられ、不要になった食器類をまとめて廃棄しているものもあります。ほかに地面を深く掘った穴蔵や、井戸などが見つっています。井戸は水脈の通っている場所にしか設置できないので、同じものを改修しながら後々まで使い続けたようです。また、屋敷地内には池が造られています。四角く掘られており、壁を杭と板で補強しています。長雨の時の排水に役立ったり、城下町の防火用水として備えられていたことも推測されます。



屋敷地と屋敷溝：（奥から大山・間宮・三好家）



食器類をまとめて廃棄したゴミ穴

### 明石のやきもの

日本のやきものの歴史の中で中世の終わりから近世の初頭にかけての時期、つまり16世紀の後半から17世紀の初頭にかけての時期は最も大きな変化のあった時代です。この時代には茶会が盛んに行われ、それにとまって、黄瀬戸、瀬戸黒、志野、織部、唐津などの茶陶が相次いで出現します。その後、17世紀の前半には肥前有田の地で磁器の生産が開始され、それは出荷港の名から伊万里と呼ばれ、全国へと普及してゆきます。このようにして始まった近世の陶磁器生産は、16世紀後半から18世紀前半にかけて、肥前、京焼、瀬戸・美濃などの大生産地を中心に展開して行きます。ところが、18世紀特にその後半になると、これらの大生産地に対して、全国的に中小の生産地で相次いで陶磁器の生産が始まります。兵庫県下でも、三田の三田青磁、篠山の王地山焼、姫路の東山焼、出石の出石焼、龍野の野田焼などの生産が始まります。明石の周辺でも朝霧焼、明石焼、ほのぼの焼、人丸焼、舞子焼などの生産が行われていました。

最近の明石城の発掘成果から、これらの明石周辺で焼かれた焼物は17世紀後半にはすでに出現しており、

18世紀の後半にはそれらが急増することが分かってきました。これらのやきものは最初は京焼の影響を受けた色絵の碗・皿などの高級陶器がその中心でしたが、やがて18世紀の後半になると、土鍋、土瓶、<sup>すりばち</sup>播鉢などの調理具を主に生産するようになります。明石で生産された播鉢は形は堺産の播鉢に非常によく似ていますが、中に明石の播鉢職人であった久保屋喜兵衛をさす「久喜」の刻印があるものがあって、明石で作られたことがわかります。これらのやきものは、明治以降、安価な瀬戸の製品が大量に流入するにつれて、その生産を縮小して行きます。



武家屋敷出土の明石のやきもの



# 阪神・淡路大震災と 埋蔵文化財シンポジウム

開催のお知らせ

—震災復興の発掘調査を検証する—

日時：平成11年12月4日（土）10:00～16:20  
（開場 9:30）

場所：ピフレホール

ピフレ SHIN-NAGATA 3階大ホール  
JR神戸線、地下鉄新長田駅南すぐ  
（神戸市長田区若松町 4-2-15）



参加費：無料

問い合わせ・申込み：当事務所まで  
（満員の際は入場をお断りすることがありますご了承ください）

内容：埋蔵文化財調査の視点から「阪神・淡路大震災」を検証します。復興調査で判明した考古学的成果を発表するほか、今後の災害時における復旧・復興事業と埋蔵文化財調査のかかわりを各分野から探り、未来に向かっての指針を提起します。

基調報告 大村敬通（兵庫県教育委員会埋蔵文化財調査事務所副所長）

成果発表1 半澤幹雄（尼崎市武庫庄遺跡・千葉県教育庁）

成果発表2 岡田章一（神戸市兵庫津遺跡・兵庫県教育委員会）

成果発表3 山上真子（尼崎市猪名庄遺跡・尼崎市教育委員会）

パネルディスカッション

意見1 和田晴吾（立命館大学教授）

意見2 古山桂子（元神戸新聞社論説委員）

意見3 藤田明良（天理大学助教授）

意見4 岡村道雄（文化庁文化財保護部記念物課主任調査官）

意見5 寒川 旭（通産省工業技術院地質調査所地域地質研究官）

コーディネーター 原口正三（元甲子園短期大学教授）

パネリスト 岡村道雄、和田晴吾、古山桂子、藤田明良、寒川 旭、川本ミハル、中田 英、榎田佳男、東 和幸、渡辺伸行、大村敬通

## 阪神・淡路大震災の復興と埋蔵文化財 V

—地震考古学と復興調査5年の歩み—

場所 ピフレホール3階 会議室A

日時 平成11年12月4日（土）10:00～15:00

シンポジウムと同時に、ピフレホール会議室Aで「阪神・淡路大震災の復興と埋蔵文化財 V—地震考古学と復興調査5年の歩み」と題して、パネル展を開催します。また、あわせて、芦屋市三条九ノ坪遺跡出土の木簡、三田市有鼻遺跡出土の鉄剣のレプリカの展示も行います。



### 編集後記

今号では足かけ5年にわたる復興調査を振り返ってみました。

編集作業を通して、改めて、多くの方々の力添えがあったことを感じました。そして、当時思ったこと、考えたことが、時間とともに薄れていたことに気づきました。

今後も折にふれ、振り返り、次代へと語り継いでいかなければなりません。（Y.T）